

勇気を出して、考えてみる

中 一

二〇二四年三月まで、私はイギリスの山奥にある、私立の小中学校に通っていた。私はその学校に通う初めての日本人で、そのときは英語もしゃべれなかった。周りは全員イギリス人で、私はクラスのみんなからそれなりに距離を置かれていた。しかし私が英語に慣れていくうちに、みんなは私とコミュニケーションをとるようになった。その中でとても仲よくなった友達に、私は思い切ったなぜみんなは私と距離を置いていたのかを聞いてみた。そうしたらこんな答えが返ってきた。

「分からないけどなぜか近寄りがたかったから。」
ちようどそのときチャイムが鳴った。けれど私はチャイムが鳴ったことに気が付いていなかったと思う。理由はショックを受けたからだろう。私はこのときの「近寄りがたかった」の意味は、見た目や雰囲気での人の印象が決まってしまうということだと思った。私の友達が言いたかった本当の意味はもしかしたら違ったかもしれないけれど、

なぜかそのときの私はその他の意味は一つも思いつかなかった。

ある日、授業で二人一組になって活動することになった。いつもは仲のよい子とペアを組むけれど、偶然、その日は欠席で、私は取り残されてしまった。普段なら他の子とペアを組むはずだったけれど、運悪くクラスの人気者が奇数で、私は一人になってしまった。少し心細いけれど、私は一人で課題を終わらせることにした。思ったより難しく、私は首をかしげてプリントとにらめっこをしたのを覚えている。先生は数回助けに来てくれたけれど、よく意味が分からなかった。そのとき何度かクラスメイトにも助けを求めた。しかし、

「他の人に聞いて。」
と言われてしまった。仕方なく教室で一人、課題を終わらせたときは、とても寂しかった。

一学期の終わりに、私たちの学年は社会科見学に行った。その日に乗った公共のバスはとても混み合っていて、私はやっとのことですすに座れたふう、と一息ついたとき、子供の泣き声が聞こえてきた。まだ二歳か三歳ぐらいの小さな男の子がお父さんの腕の中で泣いていた。お父さんは必死

であやしている。私はかわいいなと思いつながら彼らに目を向けたとき、同時に、たくさんの大人の冷たい視線が向けられていることに気が付いた。一向に泣き止まない男の子。きつとこのとき、私が彼らにできることは山ほどあっただろう。しかし、私には勇気がなく、周りの視線が怖くて、席から立ち上がれなかった。突然、グイッと何かの手を引かれて、私はとっさにその場に立ち上がった。なんと、私の手をつかんで引いたのは私の親友だった。彼女は真剣な目をまっすぐに私に向けていた。その動作で私は彼女が今からすることを把握した。そして、彼女は人混みを抜けた後、明るく、優しい声で、あの親子に話しかけた。

「あそこの席、空いていますよ。」
そのあと、彼らは人混みを抜けながらゆっくりとこちらに向かってきた。私が座っていた席を譲り、そこに親子が座ったときには、男の子はいつの間にか泣き止んでいて、そこにはまぶしい笑顔があった。しばらくしてバスが目的地に着き、さあ出発というところでさっきの親子に呼び止められた。

「ありがとう。」

今まで何万回も聞いてきたはずなのに初めて聞いたように感じた。うれしかった。あのとき、私の親友はまるでヒーローのように、勇気のある行動で、体に刺さるような冷たい視線からあの親子を救い出した。私にはできなかっただろう。実際、彼女が私の手を引かなければ席を譲らなかった。私はそのとき思った。もしペアで活動する授業のとき、彼女が学校に来て、私とペアを組んでいたなら、あのときは正反対に、協力し合い、楽しみながらすらすら問題が解けていたのだろうか。

二学期の初め、私たちが人助けをしたことが学年で話題になった。理由は校長や担任にたくさん褒められたからだろう。そしてそのことをきっかけに、クラスメイトととても親しくなり、彼らと話す機会が多くなった。それからは、ペアやグループの活動で困ることはなくなつたし、学校生活が前よりももっと楽しくなった気がした。

私はこの学校で、主に二つのことを学んだ。一つ目は、人の気持ちを考えることだ。相手の立場になって考えたとき、嫌なことはせず、してもらうてうれいことをすることは、相手への尊重につながり、結果私は自分と違う要素をもつ仲間

たちを受け入れることができた。二つ目は、勇気をもつことである。私は親友ほど行動力があるわけでも、勇気もあるわけでもないけれど、きつとほんの小さな勇気だけで変えられる未来があるはずだ。一人がたった一步を踏み出すだけで、他の人も一步踏み出そうと思えるかもしれない。もし私に見える範囲で困っている人がいれば、この気付きを生かして、助けてあげたい。